ヴァージニア・ウルフの孤独な世界

住 本 哲 子

The Solitude of Virginia Woolf

by

Akiko SUMIMOTO

1

エヴァンズ (B. I. Evans) は第一次大戦と第二次大戦の間の時代の一般的特徴は自信の喪失と絶望感であると指摘し，'the great writers are the genuinely creative artists who saw this crisis and attempted to express it in imaginative terms'[1] と述べている。この苦悩と不安の時代である第一次大戦と第二次大戦の間に，ウルフ (Virginia Woolf) が創作活動を行なったことに注目するのは，ウルフの文学を理解する上で重要なことであると思われる。この二大戦間の時代的状況をウルフはどのように認識していたか。ウルフが鋭く感じとったものは孤独であった。[2] それはとりもなおさず，「現代を生きる各人がお互から隔絶されている」[3] ということであった。ウルフが把握したこの危機的状況は作品の中に，はっきりと表現されている。

ここでは *Mrs. Dalloway* (1925) と *To the Lighthouse* (1927) の二つの作品をとりあげ，この孤独の問題について考えてみる。

Mrs. Dalloway では6月中旬のある日の朝から夜までの出来事が物語られる。このさわやかな朝，花を買いにクラリッサ (Clarissa) が出かける場面で始まるこの作品にも戦争の悲劇が暗い影を投げかけている。志願兵として戦地に行き上官の戦死をすぐそばでみてから，精神に異常をきたしたセプチマス (Septimus) の自殺が暗とすれば，クラリッサが開くパーティは明といえる。しかし，このパーティの場面でサリィ(Sally)は，'Are we not all prisoners?[4] と心の中でつぶやく。このサリィの言葉は各人が孤独な世界の住人であることを指摘したものである。クラリッサもピーター (Peter) もルクレーチア (Lucrezia) も孤独を感ずる。*Mrs. Dalloway* および *To the Lighthouse* において 'alone' などのように孤独を印象ずける言葉が，かなり頻繁に使われていることに気付く。それでは *To the Lighthouse* について調べてみよう。第一部 'The Window'，第二部 'Time Passes'，第三部 'The Lighthouse' からなっているこの作品の執筆当初ウルフは日記 (1925. 5. 14) の中で，ボートの中で 'We perished, each alone' と吟ずる父親を中心人物として描くと述べている。[5] 実際の作品はこの日記に記された構想とは多少違っているが，第三部の 'The Lighthouse' という章で，ラムジィ氏 (Mr. Ramsay) が口ずさむクーパー (William Cowper)[6] の "The Castaway" という詩の一節である 'We perished, each alone' が繰り返し使われている。それぞれの場合についてみてみる。

1. "Alone" she heard him say, "Perished" she heard him say[7]
2. he cried aloud, "We perished," and then again, "each alone."[8]
3. she was murmuring to herself "We perished, each alone"[9]
4. we perish, each alone, and his remoteness[10]
5. and she murmured, dreamily, half asleep how we perished, each alone.[11]
6. he might be thinking, We perished, each alone[12]

'We perished, each alone' という詩の一節は孤独なラムジィ氏の性格を浮き彫りにしている。そしてこの詩句はリリィ (Lily), キャム (Cam), ジェイムズ (James) の心に影を投げかける。順を追ってみてみよう。1の場合はラムジィ氏がいうのをリリィが耳にするのであり，2と6はラムジィ氏，3～5はキャムの心の中で語られる。第一部で果せなかった燈台行きの実現が第三部の主題であるが，燈台に向うボートの中でラムジィ氏，ジェイムズ，キャムの間には対話がみられない。各人がそれぞれ心の中で思考しているにすぎない。燈台へと向う船をみまもるリリィも想いに耽っている。この4人の人物をつなぐ役割をしているのが，'We perished, each alone' という詩句である。ベネット (Joan Bennett) が述べているように，この詩句は 'the sense of chaos and of loneliness'[13] を喚起する。ラムジィ氏，ジェイムズ，キャム，そしてリリィも孤独な世界の住人であるといえよう。この孤独のイメージはウルフの作品の 'tone' ともいえるが，ウルフはこの孤独な世界の中で 'life' の意味を探求し続けたのである。

ウルフは "Modern Fiction" と題するエッセイの中で次のように述べている。

> Examine for a moment an ordinary mind on an ordinary day. The mind receives a myriad impressions—trivial, fantastic, evanescent, or engraved with the sharpness of steel... life is a luminous halo, a semi-transparent envelope surrounding us from the beginning of consciousness to the end.[14]

この 'life' を伝達することが作家の使命だと考えるウルフは従来の小説形式を否定し，'life' を捉えるための新しい形式を模索するのである。*The Voyage Out* (1915) から *Between the Acts* (1941) に至るまでウルフの絶えざる実験が行われるのである。ウルフの興味は伝統的なプロットやアクションにあるのではなく，[15] 内面の世界にあった。外界の事象が心に起した波紋を写し出すことこそウルフの意図したことであった。それ故にウルフは登場人物がそれぞれ受けとめた無数の印象を刻明に描くのである。外界の事象は時と共に変化し，とどまることなく流動する。この水平方向に流れる外界の事象と垂直方向に向う心とのかかわり合いを問題にしたのがウルフの小説である。そしてウルフが発見した実験的手法による小説は，他の作家にはみられない特異なものを持っている。*Jacob's Room* (1922) が出版された時，クライヴ・ベル (Clive Bell) はウルフの創作態度について，'She watches life, as it were through a cool sheet of glass'[16] と批評しているのはウルフ文学の核心にふれるものといえる。*Mrs. Dalloway* や *To the Lighthouse* でもウルフは冷徹な眼で，事象をある一定の距離をおいて眺めている。*Mrs. Dalloway* および *To the Lighthouse* において窓は重

要な役割を果している。フリードマン (Ralph Freedman) は窓の持つ二面性について言及し，「窓が半透明であることが内と外との融合を瞬間的にではあるがもたらすのであり，又窓は内と外とを隔てるものとして存在するため内と外とは隔絶される」[17] と論じているが，ウルフが作品の中で意識的に窓を使ったのは内と外とを距離をおいて表現するためであったと思われる。

Mrs. Dalloway を例にとってみよう。

> Oh, but how surprising!—in the room opposite the old lady stared straight at her! She was going to bed. And the sky... The clock began striking. The young man had killed himself; but she did not pity him; with the clock striking the hour, one, two, three, she did not pity him, with all this going on.[18]

クラリッサは華やかなパーティから抜け出し，小部屋で少しの間沈思する。パーティの席で青年の自殺について聞いたクラリッサは死について思いをこらすのである。窓際にたたずむクラリッサと窓の外にみえる老婦人の姿と過ぎ去って行く時が悲哀を帯びた調子で美しく描き出される。この時窓の境界がとれ内と外とが融合し，クラリッサは一瞬死を容認する。しかしやはり窓の存在は内と外とを隔てるのであり，クラリッサは再びパーティの席に戻る。

ウルフの手法は確かに画家のそれに似ている。[19] *Jacob's Room* でみせた視覚的，絵画的な手法は *Mrs. Dalloway* および *To the Lighthouse* において一層円熟さをましている。

To the Lighthouse でリリィは 'life' の意味を探求する。

> This, that, and the other; herself and Charles Tansley and the breaking wave; Mrs. Ramsay bringing them together; Mrs. Ramsay saying "Life stand still here"; Mrs. Ramsay making of the moment something permanent... In the midst of chaos there was shape; this eternal passing and flowing (she looked at the clouds going and the leaves shaking) was struck into stability.[20]

十年前と同じ位置に立ち，未完成の絵に向いながらリリィは瞑想にふける。リリィの心にふとラムジィ夫人 (Mrs. Ramsay) の姿がよみがえってくる。ラムジィ夫人の姿を想い起すことにより，リリィは瞬間に永遠の相をみるのである。リリィのこの啓示的体験は，晩餐の場面でのラムジィ夫人の体験と同一のものである。晩餐の席でラムジィ夫人は瞬間を凝固させることに成功し，永続するもの，永遠に残るものを感得することができた。

次の文章はラムジィ夫人の体験を示している。

> ...; there is a coherence in things, a stability; something, she meant, is immune from change, and shines out (she glanced at the window with its ripple of reflected lights) in the face of the flowing, the fleeting, the spectral, like a ruby;...[21]

晩餐の場面でのラムジィ夫人と同じように，リリィもまた瞬間が何か不変のもの，永続するものだと感ずるのである。*To the Lighthouse* から引用した上の二つの文章をみると，いずれも（　）の中の語句は刻々と変化する外界の事象を表現していることがわかる。流れる時間の中にありながら瞬間を静止させることが，推移する時間を超克することを意味する。

2

ウルフの作品に対する批評家の評価についてみよう。ベネット[22]とディシス (David Daiches)[23]は *Mrs. Dalloway, To the Lighthouse, The Waves* (1931), *Between the Acts* の四篇がウルフの最高傑作であると断言している。この四篇の中で *The Waves* と *Between the Acts* の評価をめぐっては意見が分かれるが，*To the Lighthouse* については多くの批評家は高く評価している。ウルフ自身 *To the Lighthouse* 執筆当時，*Jacob's Room* や *Mrs. Dalloway* の時のように苦闘することもなく非常にのびのびと書いている。[24] *Jacob's Room* や *Mrs. Dalloway* より *To the Lighthouse* の方が精妙だとウルフは語っている。[25] ベイジャ (Morris Beja) は *Mrs. Dalloway* と *To the Lighthouse* はすぐれた作品だと述べている。[26] フォースター(E. M. Forster)は三大傑作として，*Mrs. Dalloway, To the Lighthouse, The Waves* をあげ，*The Waves* が最もすぐれた作品であるが自分にとって好ましい作品は *To the Lighthouse* だといっているのは興味深い。[27] ジョンストン (J. K. Johnstone) は *To the Lighthouse* の構成の緻密なことに注目し *Mrs. Dalloway* よりもすぐれた価値を認めている。[28] ウルフは偉大な作家ではないとしながらも，コックス (C. B. Cox) は *To the Lighthouse* は立派な作品であると評価している。[29] チェンバーズ (R. L. Chambers) は *To the Lighthouse* は意識の流れの手法を見事に駆使し，登場人物の内面の世界を描出した傑作であると最高の讃辞を与えている。[30]

1920年代の偉大な作家である[31]ウルフの小説は 'a series of efforts to express, and hold, the moment of vision'[32] であった。ウルフが捉えた瞬間はすぐにしたたり落ちるとしても，それは珠玉のように燦然と光り輝いている。

ウルフと親交のあった人達はウルフの特異な才能を認めて，殆んど一様にウルフは天才であったと語っている。[33] 天才かどうかをはかる尺度は色々あると思われるが，セシル (David Cecil) が述べているように 'a genius means somebody who sees the world and is able to make other people see it in a different light to anyone else.'[34] だとするならばウルフは間違いなく天才である。しかしイシャーウッド (Christopher Isherwood) が指摘しているように，'Her genius was intensely feminine and personal'[35] であったことは認めなければならない。

(Notes)

(1) B. I. Evans, *English Literature Between the Wars* (Methuen & Co., London, 1949), p. 12.

Cf. Lord David Cecil, "Epitaph on Virginia Woolf, "*T. L. S.*, (April 12, 1941).

Between one great war and another the work of Virginia Woolf has been begun and ended.

(2) Cf. G. S. Fraser, *The Modern Writer and His World* (Kenyusha, Tokyo, 1960), p. 128.

In spite of all their beauty and charm, the atmosphere of Mrs. Woolf's novels is often rather a sad one. What she is most deeply aware of is what a contemporary poet, Mr. Louis MacNeice, calls "the loneliness, the incommunicableness" of life.

(3) 坂本公延『とざされた対話』(桜楓社, 1965), p. 6.

(4) V. Woolf, *Mrs. Dalloway* (The Hogarth Press, London, 1963), p. 221.

(5) V. Woolf, *A Writer's Diary* (The Hogarth Press, London, 1959), p. 77.

(6) Cf. *Poems* by William Cowper (Everyman's Library, 1950)

(7) V. Woolf, *To the Lighthouse* (The Hogarth Press, London, 1960), p. 227.

(8) *Ibid.*, p. 256.

(9) *Ibid.*, p. 258.

(10) *Ibid.*, p. 262.

(11) *Ibid.*, p. 293.

(12) *Ibid.*, p. 318.

(13) Joan Bennett, *Virginia Woolf : Her Art as a Novelist* (Cambridge University Press, 1964) p. 104.

(14) V. Woolf, *The Common Reader I* (The Hogarth Press, London, 1957), p. 190.

(15) *Ibid.*, p. 188.

(16) Clive Bell, "Virginia Woolf," *Dial*, LXXVII (December 1924), p. 458.

(17) Ralph Freedman, *The Lyrical Novel* (Princeton University Press, Princeton, 1963), p. 231.

The transparency of the window gives the illusion of participation by consciousness in the world of objects ; it suggests the momentary union of perception combining self and world. But the window also emphasizes aloofness and isolation.

(18) *Mrs. Dalloway*, p. 204.

(19) Clive Bell, "Virginia Woolf," p. 459.

(20) *To the Lighthouse*, pp. 249-250.

(21) *Ibid.*, p. 163.

(22) *Virginia Woolf : Her Art as a Novelist*, p. 98.

(23) David Daiches, *Virginia Woolf* (Norfork, 1963), p. 121.

(24) *A Writer's Diary*, p. 85.

I am now writing as fast and freely as I have written in the whole of my life ; more so—20 times more so—than any novel yet.

(25) *Ibid.*, p. 99.

(26) Morris Beja, *Epiphany in the Modern Novel : Revelation as Art* (Peter Owen, London, 1971), p. 146.

(27) *Recollections of Virginia Woolf by Her Contemporaries* edited by Joan Russell Noble (Peter Owen, London, 1972), p. 190.

(28) J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group* (The Noonday Press, New York, 1963), p. 347.

(29) C. B. Cox, *The Free Spirit* (Oxford University Press, London, 1963), p. 112.

(30) R. L. Chambers, *The Novels of Virginia Woolf* (New York, 1971), p. 38.

(31) *Ibid.*, p. 94.

(32) Giorgio Melchiori, *The Tightrope Walkers* (Routledge & Kegan Paul, London, 1957), p. 181.

(33) Cf. *Recollections of Virginia Woolf by Her Contemporaries*, pp. 49, 80, 101-102, 139, 170.

(34) *Ibid.*, p. 126.

(35) *Ibid.*, p. 176.